

平和の理論

— 直接的・構造的・文化的平和を構築する —

ヨハン・ガルトゥング

現代平和研究のパイオニア

藤田 明史 訳

平和研究者

1. 平和 (Peace) という一単語の中にあるもの：至高善 (summum bonum)

【平和の定義】

われわれがその方向に向かっているところのものの定義を試みよう。

平和とは、自然・人間・社会・世界という諸空間における、受難／苦痛 (suffering) の不在であり、達成／歓喜 (fulfillment) の存在である。

【健康と平和】

しかし、われわれは、健康というもうひとつの至高善を通して平和にアプローチしてみよう。

われわれは、平和 (Peace) と呼ばれる風景——過去 (Past)・現在 (Present)・未来 (Future) に区分されている——の上空を飛んでいる知的ヘリコプターの中にいる。そして平和に隣接し、健康 (Health) というよく似た風景が同じように下位区分されて存在している。両者において探究は、苦痛の削減、すなわち健康においては病気と呼ばれ、平和においては暴力と呼ばれているものの削減についてである。そこには、至高悪 (summum malum)——一方における暴力－死、他方における病気－死——の回避を超え、その彼方に、平和・健康というあの2つの単語において表現される究極の善、すなわち至高善 (summum bonum) を追い求める、個としての自己 (self) においてはより多く健康への、集合的な自己 (Self) においてはより多く平和

への、終りなき探求があるのだ。

健康学・平和学、健康教育・平和教育、健康政策・平和政策の重要性は十分に理解できよう。しかしそれはどのように行われるのか。

われわれは、病気——身体・精神・魂に対するトラウマ (trauma)、子供にとっての感染症、成人にとっての悪性腫瘍、心臓疾患、精神障害などの現代病、老人にとっての転倒や骨折——を回避しつつ、未来の健康 (Health-Future) へと旋回、下降するとしよう。

トラウマに関して病気は警報を発している。初歩の助けとしては、瀉血の中止、水死に対処するための口対口人口呼吸の中止、等々。感染症の予防措置としては、手や身体の洗浄、歯磨き、寒暖・乾湿に対する防護。第三のカテゴリーに対しては、喫煙、ストレス・緊張など発ガン物質の回避、栄養摂取や運動の励行。老年の者には再び警報の発令。以上、一般的には、精神的・社会的な健康よりも身体的な健康に関するものである。

回避すべき要因すなわち病原体 (病気起因物質 pathogens)があり、追求すべき要因すなわち健康体 (健康起因物質 sanogens)がある。現在においてこれを実行せよ、そうすれば未来が眼前に拓け、長期間、健康な生活を営むことができよう。

われわれは、過去の健康 (Health-Past) から兆候を、すなわち、病気が突発する前に何を行うべきであったか、また慢性病といかに共存すべきであったかを拾い上げ、そして、現在の健康 (Health-

Present) における急性疾患に対処する。過去からの学習、現在における治療医学、未来における予防医学、こうしたことが個体的かつ社会的に実行されるならば、まさに完璧である。

すべきことおよびすべからざることの簡単さに留意しよう。それらは誰もが実行でき、実行すれば長期のそして強い生命がわれわれに与えられる。それはまさに健康構築である。その多くは常識であり、多くは研究に基礎付けられている。なすべき仕事はまだまだ多く残されている。

そう遠くない過去において、病気の一般的原因と見られた悪い体液を身体から排除する、そうした瀉血のための吸血が行われていた。しかし、瀉血は患者を弱め、健康ではなく死を引き起こしうるものであった。さらにそれは単一の原因に帰された。

以上述べた簡単な健康のルールは2つのカテゴリーに分かれる。

第一は、病気を生み出す病原体の回避に注目する。注意を怠ることなく、清潔を保持し、中毒性のものを吸入・摂取しない。それらはしばしば警告であり、悪い味覚・嗅覚を伴うものの、誘惑性もまたきわめて強い。そして、ストレス、対処しえないコンフリクトを回避する。

第二は、より強い身体・精神・魂、そして、社会的関係を形成する健康体に焦点を当てる。十分な栄養と運動、さらには、ストレスやコンフリクトを建設的に対処することもこのカテゴリーに入る。

前者は病気を回避するために行われる、消極的健康 (negative health) のためのルールであり、後者は病気に導くおそれのある傷害に抵抗し、達成に向けてより接近する力を養うために行われる、積極的健康 (positive health) のためのルールである。それらは自動的にはやって来ない。主体のある行為 (acts of commission) や主体なき行為 (acts of omission) が必要とされる。

こうした旅から情報を得て、われわれは平和に入っていく。主体のある行為および主体なき行為によって直接的暴力および構造的暴力を、さらにそれらを正当化する文化的暴力を回避するのに、同様に簡単なルールがあるだろうか。そして、平和構築の

ためのルールはどうか？ 少なくとも今までは、残念ながら多くはない。

邪悪な敵という血の放血によって自分の血を守ろうとする、そうした瀉血的段階は未だ残存している。暴力、戦争である。

平和構築のルールはどのようなでありうるか。回避すべき戦原体 (戦争起因物質 *bellogens*) はどのようなものか。そして、追求すべき平和原体 (平和起因物質 *paxogens*) とは何か。脱分極化、人間化、非拡大、脱抑圧などがまずは思い浮かぶ。しかし、熱が病気の症状であるように、それらは暴力の部分すなわち諸々の症状であるにすぎない。われわれは回避すべき暴力の、そして追求すべき平和の、根源にある原因を求めているのである。

【平和の小さな理論】

ヘリコプターから見る簡単な鳥瞰図、平和の小さな理論 (mini theory of peace) は次のようだ。

- ・過去の平和 (Peace-Past) にとって、戦原体は暴力に起因する未処理のトラウマであり、平和原体はトラウマ後の和解 ((re) conciliation) である。

- ・現在の平和 (Peace-Present) にとって、戦原体は未解決の紛争 (コンフリクト conflict) であり、平和原体は紛争の解決 (resolution) ないし紛争の転換 (transformation) である。

- ・未来の平和 (Peace-Future) にとって、戦原体は平和プロジェクト (peace project) の不在であり、平和原体はジョイント・プロジェクトの建設 (joint project construction) の存在である。

すなわち、和解+解決+建設=平和構築 (peace building)。

しかし、介入や対話によって、みんながトラウマ、コンフリクト、そしてプロジェクトを扱う調停者になることはできない。健康においてちょうど、われわれがみんなを医者、ナース、栄養士、体操教師にすることができないのと同じである。ケア、清潔、運動、栄養など、彼らもまた身体のための簡単なルールを教えるだけで、健康の知的、精神的、社会的側面への配慮を欠く。しかし、みんなが実行できるものばかりである。しかも、そうした実践を正当

化する文化を健康はもっている。今のところ、平和にはそうしたものが無い。探究も緒に就いたばかりである。

「コンフリクト衛生」のための簡単なルールとはどのようなものか。

- ・コンフリクトを当事者間のものとは見ないで、不両立な目標間のものと見る。

- ・目標に関して自己抑制を奨励する。世界は唯我独尊ではない。

- ・対話を通じてすべての当事者の目標と手段を見出す。

- ・目標と手段に関して正当なものと正当でないものを区別する。

- ・すべての当事者に正当な目標・手段を提供する新しい現実を想像する。

- ・そのような新しい現実を実践するのに新規かつ平和的な関係性・計画性をもつ。

- ・そして、仮にそれが機能しないならば、最初からやり直す。

(他者を理解するのに共感 (empathy) を、新しい現実のために創造性 (creativity) を)

7つの簡単なルールは、暴力を回避する消極的平和 (negative peace)、および、世界における自然、内的自己、夫婦、仲間、国家、民族、地域、文明とともに平和を構築する積極的平和 (positive peace) の両方のためのものである。

しかし、当事者には、トラウマの加害者および被害者が含まれているのではないか。彼ら両者もまた、簡単なルールによる過去からの解放を必要としている。

- ・元に戻ることを願い、何が起こったかを理解することで過去を清算する (clear the past)。

- ・過去を後ろに置き去り、ジョイント・プロジェクトにより未来を建設する (build a future)。

プロジェクトを建設するのに、同程度に基本的な2つの簡単なルールがある。

- ・衡平 (equity)：相互のそして均等な (and equal) 給付のための協力。

- ・調和 (harmony)：他者の苦しみを苦しみ、他者の喜びを喜ぶ。

【平和の公式】

人間の組織の諸レベルを通じて、思考・発話・行動に役立つ、簡単なそして実践に向けた公式 (フォーミュラ) をわれわれは必要とする。どのようにして？ 善 (the good) を悪 (the bad) で割ることにより、われわれは健康と平和の公式を得る。

$$\text{健康} = \frac{\text{健原体}}{\text{病原体}} \quad \text{平和} = \frac{\text{平和原体}}{\text{戦原体}}$$

善が多いほど、悪が少ないほど、より良い。下限はゼロであり、上限はない。病気と暴力の定式化は、病原体と戦原体にのみ注目するであろう。しかし、積極的健康・積極的平和のためにも病原体と戦原体をわれわれは必要とする。それは最初から最後までわれわれに付きまとう。

しかしこの公式は一般的にすぎる。上述の小さな理論を用いた、より具体的で簡単な平和実践のためのものとして、われわれは次の公式 (フォーミュラ) を提案する。

$$\text{平和} = \frac{\text{衡平} \times \text{調和}}{\text{トラウマ} \times \text{コンフリクト}}$$

より衡平かつ調和であるほど、より良い。より未完結の和解そしてより未解決のコンフリクトであるほど、より悪い。和解と解決がまさに望まれる。良い結婚のための悪い公式ではない。それだけでも悪い試金石ではない。

この公式は4つの具体的な実践を示唆している。それらは知識とスキルを要求するものの、日常生活のための簡単なルールである。

- ・過去のトラウマを和解させる。過去を清算し、誤りを認識し、再び繰り返さないことを望み、それをいかに行うかとともに未来について対話する。

- ・現在のコンフリクトを解決する。両立不可かつ矛盾する目標をより両立させ、否定的な態度と行動をよりソフトなものにする。

- ・未来の衡平を建設する。相互のかつ均等な給付のための協力。

・未来の調和を建設する。感情的共鳴、すなわち道教的な意味において、他者の喜びを喜び、他者の苦しみを苦しむ。

平和の公式はまた、健康との類似性の基礎に立つ、基本的な4要素をもつ1つの言説を提供している。

われわれは「健康の国」(Health)に着陸し、降り立ち、そして大地に耳を当てる。

大地の奥深くゴロゴロ音がする、時に強く、特に弱く。そして静寂。

精神－身体に対して深層自然(deep nature)がある、未知の、不可知または否の、緩和可能または否の。探究がどこまでも続く、精神と身体がいかにプログラム化されているか、遺伝的または否か、個体における半意識・下意識・無意識への、おそらく未知を求めて。

精神－身体には主要な病気がある。「老化」において見られる痴呆症、アルツハイマー、パーキンソンなどである。予後は、不可逆性、精神－身体が消滅、すなわち死に至る。そして、深層自然に主要なトラウマ、すなわち「ジシン」や「ツナミ」など新しい病気が蓄えられよう。緩和が可能か否か、新しい健原体が存在するかどうか、それらは探究が示すだろう。

われわれは「健康の国」から「平和の国」(Peace)に歩いて移動し、大地に耳を当てる。

大地の奥深くゴロゴロ音がする、時に強く、特に弱く。そして静寂。

人間の条件の社会的側面に対して深層文化・深層構造(deep culture-structure)がある、未知の、不可知または否の、緩和可能または否の。より深い文化の諸層を求めて、集合的な半意識・下意識・無意識の深みへ、探究がどこまでも続く。おそらく抑圧された、未知を求めて。

文化や構造を消滅させる不可逆かつ老化のプロセスがあり得るのか。文明の消長がなぜ生じるかの理由はあのか。そして、あのゴロゴロした音に隠された戦原体や平和原体があるのだろうか。

われわれは研究や調査を繰り返し行う。知識や意識が低いほど、文化・構造の内部化や制度化によるプログラミングが多くなる。けれども、深層文化は

価値を生成し、深層構造は利益を生成する。両者とも目標となり、遅かれ早かれ、それらはトラウマやコンフリクトとして表面化し、行動のための公式に提供される。

しかし、何も知らないものに関しては、何もしまいま、放置するのがよい。

【安全保障・正義・共生との関係】

他の言葉ではどう語られているか。

こうした平和の言説は他の諸概念とどのように関係しているのか。

安全保障(security)は直接的暴力の不在を意味する。それは、最悪の非衡平とも両立し、消極的平和でさえありえない。安全保障は、法や秩序に密接に関連し、変化がなく、現状維持である。積極的平和は彼らの眼には疑わしいものに見える。まさにそうなのだ。積極的平和は二重の意味で革命的に見える。第一は、焦点が衡平に当てられる。第二は、高いレベルの一体性、すなわち融合に門戸を開く。反面、積極的平和の不在は、自律的な個人・国家の自由に道を開く。そして、そうした自由は様々な意味において搾取の自由を含むことになる。

暴力を他者すなわち「危険な階級や国家」に場所をあてがうことにより、安全保障は自閉的になり、相互性や関係性を喪失する。そして安全保障学は、学問的に制度化された偏執症・自閉症に簡単になり下がってしまう。

人間の安全保障(human security)は平和により接近する。しかし、言外に暗示する意味が重要である。たとえ「人間の」が積極的に聞こえても、「安全保障」は「国家安全保障」軍事力であって、軍備競争を誘発し得るものであり、まさに、介入、侵略、占領、包囲と共存し得るのである。そして、「国家」はハリネズミを暗示し、外に向かう針を内に向かわせ、排除された外部の犠牲のもとに内部に依存するのである。

「人間」(human)は、国家内部の7つの側面、すなわち、食料、健康、環境、人間、経済、地域社会、政治に向き合うことで、国家の性格の変革を想定している。しかし、人間と国家における、そして

人間と国家のための共同の創意がなく、すべてが限定的であり、関係性の創出もない。人と人との間、国家と国家との間の関係性にそれらはビルト・インされていないのである。そして、まさにそこにおいて「相互性および均等性」(mutuality and equality)への着目が、1954年の周恩来とネルーの「平和五原則」(panchashila)、および積極的な精神の健康の概念——それは筆者をも鼓舞した——と合流するのである。

軍事面はどうか。腕力から軍事力まで。安全保障のために、垂直的には上からの力として、しかし、水平的には力のバランスとして？

その到達距離が基本的である。軍備が国家内部にだけ限られているならば、それは自衛のための防衛的防衛(専守防衛)である。それはオリジナルなスイス・モデルであり¹⁾(Fischer, 1982)、攻撃的でも挑発的でもない。国家を超えるならば、軍備は両方の性格をもち、他者に対して潜在的に脅威である。仮に使われなくても、目標を定めなくても、脅威は心理的である。防衛的防衛は暴力でも積極的平和でもなく、おそらくは軍備によってもたらされる消極的平和であろう。

共通の安全保障(common security):「あなたの安全が保障されないならば、私の安全は保障されない」ということが、防衛的防衛の自己に依存する消極的平和から、協力的な積極的平和への架け橋となろう。他者が攻撃的武器を持っているなら、両者の安全は保障されない。このことは、両者にとって防衛的防衛が解決になることを指示している。しかしそのためには、消極的な「ゴールデン・ルール」(「他者があなたにしてほしくないことをあなたは他者にしてはならない。」「他者にしてほしくない軍備の配置をあなたは他者にしてはならない。」)に導かれた、接合または結合、すなわち『わたし』と『あなた』に付加された「われら」が必要となる。

そこから積極的な「ゴールデン・ルール」へはあと一步の近さである。それは低い段階での積極的平和と言えよう。

このような脈絡において、日本から戦争の権利を剥奪した日本の「平和憲法」にわれわれはどのよう

な平和を見出すか。それは消極的平和である。焦点は、戦争への不参加に置かれ、東アジア共同体のようなジョイント・プロジェクト、および衡平には置かれていない。前文にはジョイント・プロジェクトとしての交易が述べられているものの、実践的にも理論的にも、交易の実践に衡平がビルト・インされた国として日本は認められていない。

平和は建設されなくてはならない。何かなされるべきかの理解は、そうした仕事をいっそう容易なものにする。しかし健康の場合に比して、その理解の程度は低い。

正義(justice)の概念はどうか。問題含みである。少なくとも4つの意味が「正義」にはある。刑事司法および社会的正義があり、前者には懲罰的正義と修復的正義が含まれ、後者には分配的正義と衡平的正義が含まれる。

懲罰的正義の下で焦点は、懲罰、暴力、拘留、審判のため被告を法廷に召喚して行う罪状認否に置かれる。有罪であれば懲罰が続く。時間そして／または罰金の剥奪。正義の戦争および平和の強制も懲罰的・暴力的正義の役割を果たす。

修復的正義の下で焦点は、法を破った行為者の社会への再統合に置かれる。たとえば、「共同体の奉仕活動」などによって。

分配的正義の下では、焦点は「均等性」(equality)に置かれる。人間および国家に関して、機会均等、(誕生時に)与えられたものと(その後)に達成されたものとの低い相関、高低間の距離の短縮、底上げなど。保守主義者はすべてに反対する。自由主義者は機に乗じる。社会民主主義者は低い相関を追加する。社会主義者はその他を追加する。

衡平的正義の下では、焦点は「衡平」(equity)に置かれる。相互のそして均等な給付を生む構造が創出される。これは積極的平和である。

これら4つの正義の政治に対する意義はどのようなものか。

もし懲罰的正義が勝者の正義であれば、トラウマは癒されず、コンフリクトは解決されず、プロジェクトは建設されない。

もし修復的正義が無法者・加害者を修復するので

あれば、それは和解を助長し、コンフリクトを解決し、プロジェクトに門戸を開くであろう。

もし分配的正義が遂行されるなら、当事者間の均等性が、非暴力、対話、衡平、共感、調和を促進するであろう。

もし衡平的正義が構造にビルト・インされれば、それは平和をもたらすであろう。

規範としての懲罰的正義は、勝者の正義を他方の側（敗者）に拒否することに起因する暴力闘争を長引かせ、それが非暴力的闘争に対して行使されるときには、反生産的にもなりうる。他の3つのタイプの正義は、それらが積極的に行われるとき、平和創出的でありうる。

共生 (kyosei) という言葉には何があるか。

日本語の「共生」、英語の *conviviality* は、軍事的含意がなく、関係性に他ならないから、「人間の安全保障」よりもいっそう積極的平和に近いところに来る。〈kyo〉とは「共に」であり、〈sei〉とは「生きる」であり、日本語の意味論的・統辞論的・語用論的コンテキストに位置付けられる (Murakami, Kawakami, Chiba, 2005)²⁾。スペイン語の *convivencia*、ドイツ語の *Zusammenleben*、ギリシャ語の *symbiosis* は、いずれも「共に生きる」(life together) である。生 (life, bio) は上昇、停滞、下降しうるものであり、sym は「共に」である。共生と同じく *symbiosis* は均等給付 (equal benefit) を目指すものである。Abiosis (非共生) は相互に無関係であることを意味し、antibiosis (反共生) は一方が上昇し他方は下降する。

共生には忍耐 (tolerance) の側面がある。「異なる伝統と文化的価値の平和的共存」、「それぞれ他の神聖な場所を認識する」、「表現の自由」の制限はあるが、神聖な場所を踏みつけない。暴力の不在である消極的平和を指向する。

そして、会話 (conversation) の要素がある。「会話は共生の最も基本的な人間の本質である」、また「異質な人々またはグループ間の交流を楽しむ」。対話をともなう積極的平和を目指している。

さらに、共通性 (commonality) の側面がある。「共生は、…相互に変容し、違い・反対意見・多様

性を認め合う、そうした共に生きる様式を意味する。」共通性は、「エコロジカルな持続可能性および社会的平等性」のようなジョイント・プロジェクトも付加する。共生は一体性 (togetherness) により生成され、次の定式が成り立つ。

共生 = 忍耐 + 会話 + 共通性 = 積極的平和

古典的な日本の家族・村・会社において、垂直的・集会的な日本の深層文化・構造と共存するものとして数多の「共生」がある。こうしたグループ内の概念として、積極的平和の側面があるものの、「共生」を国際的に拡張することは問題含みであろう。経営者と労働者間に行われるような、垂直距離を隔てた会話に開かれたこうした概念は、衡平を妨げるであろう。そこでは、トラウマの和解およびコンフリクトの解決は見失われる。しかし、会話中に持ち込まれることは可能であり、調和を求める他者との共感が深められる。

2. 平和の理論：ドゥッカ (Dukkha) およびスカ (Sukha)³⁾

【平和の大きな理論】

大きな理論の視野

われわれは、公式、言説、そして小さな理論よりさらにその上を見渡すために、より高く上昇することにしよう。『平和』という言葉により運ばれる偉大な概念である「平和」は、すべての言語において十全に表現されていないから、「大きな理論」(“grand theory”) を打ち立てるだけのまさに価値がある。ここで、

・「大きな」とは広大な知的領域をカバーするという意味であり、

・「理論」とは豊かな含意に富む観点を与えるという意味である。

マクロ・ヒストリーというもう1つの分野におけるかなりの経験は有用である⁴⁾。

まことに広大な知的領域である。広大な人間の空間、広大なタイムスパン、広大な時空間の地域、含意するところきわめて豊富な多くの観点。これは、

幾人かを挙げれば、司馬遷、ハルドゥーン、ヴィーコ、スミス、コント、スペンサー、パレート、ヘーゲル、マルクス、グラムシ、シュペングラー、ローキン、トインビー、ティヤール・ド・シャルダンのような巨人により生み出された。彼らの物語、マクロ・ヒストリーは数千年にわたる諸現象を記録する。「大きな物語」という言葉が適切であるように「大きな理論」という言葉もそうである。彼らの物語、それにマクロ・ヒストリーは、人間の条件における決定的な何かに光を当てる。彼らの理論は説明的な諸要因を探究する。それらの無視はわれわれ自身を大きなリスクに晒す。しかし、それらの1つを唯一の正しい物語・理論と信じることもわれわれ自身のリスクを冒す。それらの多様性において、われわれ自身を豊かにしようではないか——奴隷になることなく。それらは相補的であって、元来、相互に学び合いうるものであったに相違ない。

同じことは平和のいかなる理論についても言える。パラドクスを含む「平和を望むなら戦争に備えよ」という「力の均衡」もその1つである。パラドクスを含まない「平和を望むなら平和に備えよ」がいっそう良い。しかし、それは何を意味し、何を示唆しているのか。われわれが思考や発話だけでなく、実践のためのガイダンスを求めるのであれば、それこそが解明すべき課題であり、平和の公式はそうした一努力なのである。

一般に著者の選択におけるガイダンスについても同じことが適用される。西洋の著者の場合は特にそうである⁵⁾。

われわれは大きな理論を求めて東洋にまで飛翔しなくてはならなかった——仏教および道教を求めて。

【諸アクターのカップリング】

当初、感覚的な生 (life)、ドウッカ・スカ、または苦痛・歓喜の傾斜を取り上げた。そこがわれわれの出発点であった。

当初はまた、個々の生——バラバラであれ関係性の中においてであれ——から始めた。

コンフリクト・暴力・平和は、良くも悪くも、人々を関係付ける。アクターは平和や愛そのもので

はなく、平和や愛において繋がる。試金石は関係性の中にあるのだ。諸アクターのカップリング (結合 coupling) が基本である。あなたが置かれた関係性がどのようなかによって、あなたが平和または愛であるかが判然とする。

中国系アメリカ人 Ralph Siu (1917-1998) は「苦痛の科学」⁶⁾ (*science of suffering, Panetics*) を創始した。苦痛の単位を1ドウッカとし、ある人、ある日、「明日、歯医者予約がある」のような最低のドウッカをレベル-1、「もう我慢できない、この世に別れを告げる」のような最高のドウッカをレベル+9、と定義した。さらに集合的な苦痛の単位も展開できる。拡大された期間を通じ、他の受苦者との空間における比較、時間を通じての彼自身との比較を可能にする。良い政策目標は、最大の苦痛から始めて、全体的な苦痛を減少させることである。

これは「歓喜の科学」(*science of fulfillment*) または「福祉の科学」(*science of well-being*) に拡張できる。類推によって、歓喜の単位を1スカ、ある人、ある日、「私は明日、恋人と会いに行く」のような最低のスカをレベル+1、最高のレベル+9は「私はここに永久にとどまりたい」(カイロス) であろう。さらに集合的な歓喜の単位も展開できる。拡大された期間を通じ、他の歓喜者との空間における比較、時間を通じての彼自身との比較を可能にする。良い政策目標は、最小の歓喜から始めて、全体の歓喜を増大させることである。

ドウッカおよびスカは、包括的なタームとして消極的目標および積極的目標として、そして目標の目標すなわち至高の目標 (*the summum*) として用いることができる。人間の基本的必要に関して侮辱的か適合的かがそうした方向性にあるものだろう。

表1 スカ/ドウッカとその高低の組合せ

低ドウッカ	低い緊張、平穏	歓喜
高ドウッカ	苦痛	高い緊張、曖昧
	低スカ	高スカ

しかし、われわれはドウッカースカを、-9 から+9への変数、二元論、ジレンマと見るよりも、

両者を1つのジレンマとして、〈高 vs 低〉として、テトラレンマ（仏教の）における陰陽の矛盾に開かれたものとして見る。

これは、〈純粹暴力 vs 純粹平和〉である〈苦痛 vs 歡喜〉に、〈平穩 (blandness) vs 曖昧 (ambiguity)〉を付加することになる。苦痛も歡喜もまれである。現実はより複雑である。大部分の人々は、ほとんどいつも、おそらく平穩を体験しているであろう。他の3つのコーナーは旅先のようなものである。しかし、長期の逗留には厳しすぎる。平穩が休息の場である。

研究の単位は、1個人、または1国家のような1集合体ではなくて、結婚または連合におけるように、関係を形成しつつある (relating)、相互に結合した諸個人または諸国家である。われわれは、諸個人または諸集合体を、一時点において同時的に、または、時間を貫通して通時的に探究することができる。4つの可能性がある。個人的・同時的見地は、二者関

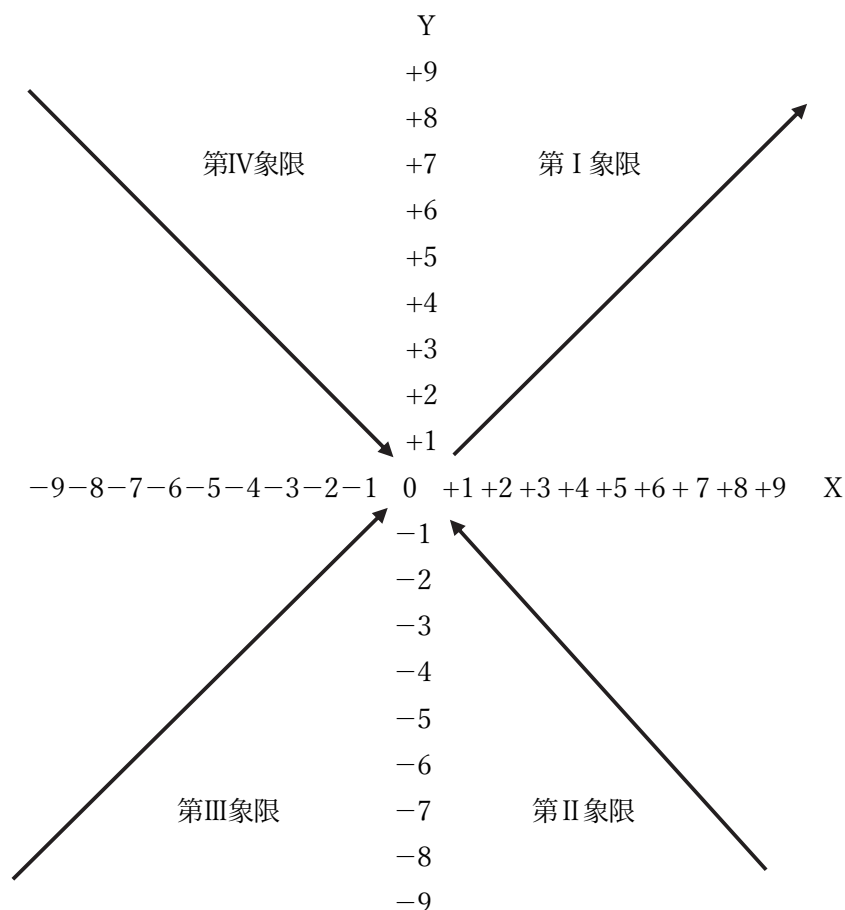
係における現下のスナップショットである。集合的・同時的見地は、連合関係の現時点でのスナップショットである。個人的・通時的見地は、ドゥッカースカ主対角線上における結婚の上昇・下降を記録する。

第4の組合せの集合的・通時的見地は、普通に理解されている、国家間における平和・コンフリクト・暴力の観念をわれわれに与える。同時的スナップショットは議論の出発点としては便利であるが、軌道はコンフリクト・暴力・平和の状況に関してより多くの情報を与える。2次元という頁の制約の下では、いかなるダイアグラムもカップルのような、2者の集合体、生の二項関係——*bio*、生きられた、結合した——に限定される。2当事者をXとYと呼ぼう。これは任意のm組に一般化できる。

XとYの2項は3通りの仕方で関係付けることができる。

・XとYは、ドゥッカースカ軸に沿って、ともど

図1 平和と暴力の基本ダイアグラム



も上昇または下降する。共生 (symbiosis)。

・一方が上昇するとき、他方は下降する。逆も然り。反共生 (antibiosis)。

・XとYは無関係で、相互に独立である。非共生 (abiosis)。

それぞれ、高い正の相関、高い負の相関、相関がほとんどないか全くない場合を示す。相関は軌道に関し通時的であり、同時的ではない。

図1はSiuの2当事者XとYの9ドゥッカ点を利用し、両者の9スカ点、および原点を付加したものである。

ダイアグラムは、主対角線 $Y = X$ 上に、 -9 , -9 (MAD、相互確証破壊) から原点を経て $+9$, $+9$ (MAB、相互確証至福) に至る軌道をもつ。主対角線上には衡平が存在し、当事者は、歓喜または苦痛を共にし、正 (積極的) または負 (消極的) の調和において、衡平を経験する。ここで「調和」とは、良くも悪くも、「共鳴」「同調」を意味する。

ダイアグラムは、双対角線 $Y = -X$ 上に、第II象限の -9 , $+9$ から第IV象限の $+9$, -9 に至る軌道をもつ。この軌道上で2当事者は、一方の歓喜は他方の苦痛となる、非衡平・非調和の関係を体験する。彼らは、共にではなく、反対の向きに動き、原点はそのどちらでもないもの (a neither-nor) を示す。

これに対し、それぞれ当事者に〈平穏—曖昧〉という次元を付加することもできよう。

さて、主対角線から始めるとし、X軸の方へ対角線を傾斜させてみよう。それは共に増加または減少する。しかし、Xの大なる利得はYの小なる利得をとまなう。そして、Xの大なる損失はYの小なる損失をとまなう。ここには非衡平 (inequity) があり、寄生性が生じる。双対角線については、Xの大なる利得はYの小なる損失をとまなう (しかし損失には違いない)。逆もまた然り。第III象限については次のように言える。対角線の傾斜は、苦痛に関して一方の大なる増大を他方の小なる増大にリンクする。さらに、非対称である象限II・IVについては、一層そのようである。

第I象限の主対角線にのみ着目すれば、われわれ

は『超越と転換』⁷⁾における「平和の対角線」を得る。そこでは、 0 , 0 は消極的超越 (neither-nor) であり、 $+5$, $+5$ は妥協、 $+9$, $+9$ は積極的超越 (両者の目標達成 both-and) である。第I象限の双対角線は「戦争の対角線」であり、 $+9$, 0 ではXが支配し、 0 , $+9$ ではYが支配する。 $+5$, $+5$ は膠着、停戦であって、妥協ではない。

傾斜・切断・移動はすべて線型である。より複雑な物語を語る、曲線の軌道をこれらに付加することができる。

これは、平和の大きな理論に適応する、そうした広大な知的領域である。ドゥッカ／スカはこの領域を定義するのに用いられた物の見方にほかならない。その内部においてわれわれは特定の理論を同定・展開しうるのである。

これを行うのに、結合の度合 (degree of coupling) なる概念は不可欠である。高い通時的相関があるとは、XとYが、その結合のゆえに1つの軌道の輪郭を辿ることである。共変動 (co-variation) が高い (低い) とき、そこには強い (弱い) 結合がある。共変動が0のとき、結合がない。分離 (decoupling) とは結合から無結合 (ノーカップリング no coupling) にいたるプロセスのことである。無結合から結合にいたる逆のプロセスは再結合 (リカップリング recoupling) である。それは、カップルの別れ、離婚、再婚のようである。結合・分離・再結合、および、それが生起した具体的な道筋は基本的な物語となる。

カップリングはまた、エンジンへの自動車の結合を思い起こさせる。それはクラッチとして知られる。プッシングは分離 (デカップリング) である。それにより、自動車の kmh [時間当たり走行距離] とエンジンの rpm [分当り回転数] は相互に独立となる。分離は、エンジンが空転する間に車をアイドル状態にするのに、「クリーニング」のためにエンジンをラッシュさせるのに、また、ターニングの前に rpm を増大させるのに使われる。クラッチの開放は自動車とエンジンを再結合させる。kmh と rpm は相互に同調する。少しのトレーニングで再結合は特段の注意がなくとも行われる。再結合が強

ければ、エンジンが車を無理やり動作させる。逆もまた然り。良いドライバーと悪いドライバーはこの点に係る。世代間またはジェンダー間ギャップのすべてにわたって、カップルはソフトな分離／再結合を学ぶがよい。ハードな結合は、神経を緊張させる。

幸せに結合した車とエンジンは相互に同調しつつ道路を順調に走行する。時々、ギアを変えることでrpm/kmn 比率を調整し、またはその比率を変えることでギアを調整する。高速・中速・低速に応じ、道路は上限だけではなく下限のスピード制限を設けている。

身体・精神・魂の三位一体において結合する恋人たちへのメッセージは次のようだ。高速での結合は甘美である、しかし消耗的で、自分にも他者にもおそらく危険である。それを維持するのに自分たちの内に十分な愛がないかもしれない。しかしあまりの低速は、退屈にすぎ、微温的で、ほとんど愛がないに等しい。結合がない状態であり、擦り切れたクラッチのごとく rpm と kmn は相互に無関係となる。スピードを変え、ギアをチェンジし、時には空転とクリーニングを行い、ターニングの前にラッシュさせるのだ。

これまでわれわれは、第Ⅰ象限におけるカップル、自動車、すなわちスカを語ってきた。車を停止させ、エンジンをアイドリングにしよう。すると、われわれは原点にいる。

そして、逆の方向に切り換える、するとわれわれは後ろ向きの調和を得る。バックミラーが無い自動車とエンジンは、間髪を入れず、受苦を共にする味気ない安楽を、すなわちわれわれにドウッカを体験させる。

もう1つのドラマ。車が前向きに走っているとき、エンジンを逆転させる。車とエンジンは相互に反対方向に動き、目的相反となり、まさに衝突軌道にある。カップルの場合への解釈は容易である。

生きたそして有機的なシステムにはこれはあまりに機械的な比喩だろうか。あるいは、機械工たちは、彼らが家族の内部——われわれ全てはそこから来る——において自動車を制作した際、意識的または無意識的に、ジェンダーや世代を横切って、そうした

カップリングを利用したのだろうか。ともあれ、こうした鶏か卵かの問題にかかずらうのはやめ、自動車は教育のために取っておき、われわれは生きたシステムに進むこととしよう。

【結合・分離・再結合】

さて、若者が「彼／彼女自身の道を行くために」親の家を出ていくのは明らかに分離である。それは永久のものかもしれない。しかし、両者が成熟し、より高いレベルでの再結合が起りうる。

分離を打破しつつあるカップルは、互いに、「私の苦痛／歓喜は、今は私のもの、あなたのは、あなたのもの、もし一致するとしてもそれは偶然にすぎない」と言う。歓喜を共にし得ない無力感による絶望の中で、彼らは苦痛を共にするだろう。あるいは、彼らは再結合するかもしれない。あるいは、「時間」が経てば、より良い結合が来ることを望むかもしれない。しかし、自動的を意味する「時間」は、困難な仕事の代替とはなりえない。

倫理的ガイダンスを得るためわれわれは旧来の規範に戻ることにしよう——いかなるレベルにおいても良い結合のあのイメージを取り戻すために。先ずは道教のルール：

「他者の苦痛を分かち、他者の喜びに満足する。…他者の幸運を自らの幸運と見なし、他者の損失を自らの損失と見なす。」

もう一つは、ズールーのウブントゥ (ubuntu) の中にあるもの。「私はあなたの中にある、あなたは私の中にある。私たちはお互いの中にある。」

両表現は、〈われ＝われ〉⁸⁾ (we-culture) の強い精神的結合を定義している。苦痛や喜びの単位は〈われ＝われ〉(we) であり、離れ離れの2つの〈私〉(I) ではない。

そしてこれは、積極的（または消極的）なゴールデン・ルール (Golden Rule) を提起する。

他者があなたに行ってほしい（ほしくない）ことをあなたは他者に行いなさい（行ってはいけない）。スカを求める（ドウッカを回避する）主体は個々の「あなた」であり、ゴールデン・ルールは、アブラハムの個人主義と両立するところの自らの利益のた

めの自己中心的なルールである。倫理的な中身は自己本位の〈私—文化〉(I-culture)であって、集合的な〈われ=われ〉ではなく、反生産的でありうる。「彼らの嗜好はわれわれのとは違っているだろう」(ジョージ・バーナード・ショー)。

同じことがカントの「定言命法」(categorical imperative)にも当てはまる。「あなたの意思の基礎をなす原則が同時に一般法の原理であるようにつねに行動せよ。」これは〈われ=われ〉ではなく、個人主義者に対する共存の交通規則である。一般化できる限りにおいて行動は有効なのである。ゴールデン・ルールがより二者間のものであるなかで、多者間の規範的な傘をカントは提供する。両者とも、〈私—文化〉における積極的共存のための倫理的内容を高めるのに有効であるものの、道教的な意味では、〈われ=われ〉におけるユニオンを生成するものではない。偏愛に反対するものとして墨子の博愛主義(兼愛)も同じであるが、キリスト教、カント、または人権の普遍主義よりずっと以前のことであった。いずれにも集合的な倫理的内容は見られない。

消極的ゴールデン・ルールは消極的平和のための良いガイドであり、積極的ゴールデン・ルールおよびカントは、積極的平和のための、そして、道教的ルールは、それよりもさらに進んだ段階のための良いルールである(これらの点は第4・5章⁹⁾において展開される)。

結合の度合、そして〈積極的結合(positive coupling) vs 消極的結合(negative coupling)〉から、われわれは〈内的結合(inner coupling) vs 外的結合(outer coupling)〉へと歩を進めよう。善と悪の観念を通じて文化によって、そして報酬と懲罰を通じて外部からの構造によって舵をとられ、内と外が一体化することで、〈われ=われ〉はきわめて強固な内的結合を生み出す。〈私—文化〉は、「その中のもの(what is in it)は私のため(for me)にある」に基礎を置いた、内的結合を生み出す。しかしまた、「その中のもの(what is in it)はわれらのため(for us)にある」を付加しても良からう——恋愛結婚、そして結婚における外的・社会的結合[見合い結婚]のように。一つが失敗しても他の

結合装置が働き始める。

紛争・平和論においてきわめて生産的な概念はジョイント・プロジェクト(joint project)である。何かを共に、力を合わせて行うことは、個別の費用・便益の下にある個人主義的協力を超え、どんなに弱くとも、いくばくかの〈われ=われ〉を呼び寄せる。当事者はまた、結婚のように、社会的な約束・契約において構造的に相互に連帯しうる。

西洋的な〈私—文化〉は、ミクロ・メゾのレベルにおける個人の自由、マクロ・メガのレベルにおける国家主権を包含する。「ジョイント」の概念は、「あなたの中の私」「私の中のあなた」の要素に扉を開く。それは、結婚または欧州連合のように、さらには〈われ=われ〉によって支えられたとき特段にそうであるように、両者を制約するのである。

個人間および国家間の競争(competition)は協同性(joint-ness)を弱める。成功、勝利、そしてNo.1は、他の者がそこから得るものは何もないことを意味する。それは[図1の]第Ⅱまたは第Ⅳ象限における二者に起る。〈われ=われ〉の協力(cooperation)の下では、彼らはともども勝利または敗北、上昇または下降する(第Ⅰ象限)。

もし、第Ⅰ象限における積極性・衡平・調和が、2者またはm個の者を第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ象限の暴力から、および傾斜に起因する第Ⅰ・Ⅲ象限における非衡平の暴力から防護する、との一般的命題¹⁰⁾をわれわれが受け入れるならば、これはきわめて具体的な意義を有することになる。

個体的または集合的レベルにおいて、〈私—文化〉がより多く宣言されるほど、積極的平和はより少なくなり、直接のおよび構造的暴力がより多くなるから、少なくとも消極的平和を成し遂げる努力がよりいっそう重要になる。

利己的な態度や行動を制約する、結婚やユニオンの束縛における〈われ=われ〉に抗して、自由および主権が「解放される、become unyoked?」¹¹⁾。便益・費用分析に基づいた西洋的〈私—文化〉および欧米の国家システムは拡大している。しかし、内的結合に基礎をおく東洋、および〈われ=われ〉やシェアリング(喜捨 zakat)に基礎をおくイスラム

のウンマ（イスラム共同体 *umma*）はまた強力である。

〈私－文化〉は内的結合に関しては弱いものの、法の支配を通じて外的結合を発見するのに適している。〈われ＝われ〉を「近代化」するのに膨大なエネルギーが支出されている。しかし、西洋は依然として自身の〈私－文化〉における非平和(*peacelessness*)を理解し得ていない。

【小さな理論と大きな理論とを結びつける】

いまや第一章の平和の小さな理論をこの知的な「大きな理論」の風景と結びつけることによって収穫物を刈り取る時が来た。

・積極的平和 (*positive peace*) は、第Ⅰ象限にあり、積極的結合－積極的調和－共生である。主対角線に近づくほどより衡平であり、極限はMAB (*mutual assured bliss*、相互確証至福) である。

・直接的暴力 (*direct violence*) は、第Ⅲ象限にあり、積極的結合－消極的調和－共生である。主対角線に近づくほどより衡平であり、極限はMAD (*mutual assured mad*、相互確証破壊) である。

・構造的暴力 (*structural violence*) は、第Ⅱ・Ⅳ象限にあり、消極的結合－非調和－反共生である。および、第Ⅰ・Ⅲ象限において見られる傾斜による非衡平である。

・消極的平和 (*negative peace*) は、原点にあり、無結合－無関心－非共生である。平和でも戦争でもない単に一点であり、MAS (*mutual assured survival*、相互確証生存) である。

コンフリクト——非常にしばしば暴力の根源的なルーツである——は、目標達成の度合間における消

極的結合である。こうして、既述の如く、競争はコンフリクトを意味する。一方の勝利は他方の勝利を排除するのである——戦争のように、また、ディベートのように、しかし対話はそうではない。1つの目標の達成が他の(諸)目標の達成を排除するとき、われわれはコンフリクトに直面する。その合成した軌跡は負の傾きをもつ。構造的暴力は外部における消極的結合に基づいたコンフリクトのタイプであり、文化的暴力 (*cultural violence*) は、内部における消極的結合に基づいたコンフリクトのタイプである。

【いくつかの帰結】

われわれはいくつかの帰結を引き出すことができる地点にすでに達した。

・積極的平和と暴力・戦争は類似的である——積極的結合(内的、外的、または両者の)を共有することにおいて。例えば、ジョイント・プロジェクト、第二次世界大戦、欧州共同体。

・コンフリクトと構造的・文化的暴力は類似的である——消極的結合(内的、外的、または両者の)を共有することにおいて。例えば、経済的競争のようなジョイント・アンチプロジェクト、差別、偏見。

・消極的平和とは、第Ⅲ象限の直接的暴力および第Ⅱ・Ⅳ象限の構造的暴力を減少させることの到達点、および、第Ⅰ象限の積極的平和を構築することの出発点である。

戦争から積極的平和への過渡期はそれほど複雑ではないに相違ない。そこには情熱に鼓舞されたジョイント・プロジェクトがすでにあり、単に内容が変われば良いだけである。もし消極的平和に停戦だけ

表 2 平和への道＝消極的平和＋積極的平和

		積極的平和	
		低	高
消極的平和	高	[2] 停戦のみ	[4] 理想・両平和の存在
	低	[1] 暴力・戦争	[3] 創造的曖昧？

表 3 基本的ダイアグラム—単純化された図 1

スカにおける Y	構造的・文化的暴力	デカップリング（分離）	衡平または非衡平な平和
無関心な Y	デカップリング（分離）	消極的平和・相互無関心	デカップリング（分離）
ドゥッカにおける Y	衡平または非衡平な戦争	デカップリング（分離）	構造的・文化的暴力
	ドゥッカにおける X	無関心な X	スカにおける X

しか見られないならば、そこには情熱も相応のプロジェクともなく、プロジェクトからの逃避や共通の無関心があるだけだ。ゆえに、鉄は熱いうちに打つのが良い。消極的平和は十分に熱くはない。

この最後の部分は若干の敷衍を必要とする [表 2]。

われわれは [1] にあり [4] にたどり着くことを欲している。どのようにしてか？ 最も単純、しかし間違いであるのは、[1] → [2]、すなわち停戦・消極的平和を経由するものである。底辺にある暴力が未解決のコンフリクトであるならば——火は消え煙が立ち昇っているような——、根源にある原因がそのまま放置され、暴力が再生産されるであろう。

[1] → [2] → [4] と直線的に行くことは、より理に適っている—— [2] における滞在が長すぎないならば。それを避けようとするれば、[1] → [2] および [1] → [4] を同時に行うことである——ただし [2] よりむしろ [3] を経由して。暴力の一部は分極化であり、そこには克服すべき曖昧さがある。システムがいくつかのブロックに分極化するとき、それらを架橋することが必要となる。運動や大胆な政府はこのような架橋を少なくとも「斥候」として行う。そして、それは強く推奨される。1960 年代の米国南部における公民権運動を共に行進・協働した白人と黒人は、まさにこのことを行った。彼らの行動は、目標に導かれた、悪を追い払う善そのものであった。公民権運動は彼らが見たいと欲した未来そのものであった（ガンディー）。

しかし、政府は [2] を主張しがちである。先ずは暴力を停止し、そして調停を行う。消極的平和は大きな安堵であることは明らかだ。論点は、それが目標に導かれたものでないことにあるだろう。暴力

がないという関係性は、ほかでもなく、関係性がないということであり、1 つの目標状態ではないことである。そして、第 I 象限でのジョイント・プロジェクトにより供給される免疫性がないということである。荷車が馬の前に置かれているのだ。

平和への 3 つの道、すなわち [1] → [2]、[1] → [3]、[1] → [4] を、その道の専門化したアクターと共に旅行するのがより良い。

本章全体を簡単な表に要約しよう [表 3]。

戦争および積極的平和は、下段左の隅および上段右の隅に位置する——苦痛／歓喜が均等か否かに依存する、戦争および平和の〈衡平 vs 非衡平〉間の区別をともなっている。戦争では敗者・受苦者あるのみというのは本当である。しかし、敗北・苦痛からさえいくらかの満足が得られる——他者よりは少ないにしても。加えて、もしいくばくかの達成感があるとすれば、より抜け目のないそして不可視の構造的暴力が機能していたであろう。さらに、もし積極的平和が善ならば、他の者より平和をより多く得るのがもっとよい——こう〈私文化〉は言う。

一方は無関心で、他方は苦痛／歓喜であることを表示するセル [デカップリング（分離）] が 4 箇所ある。それらは、隅 [下段右の隅および上段左の隅] にある構造的・文化的暴力、真ん中にある消極的平和、または両者の拡張と見なすことができる。平和の理論は、第 III 象限の直接的暴力だけではなく、第 II・IV 象限の構造的暴力からの脱出口において開発の理論と合流する。いかにしてか？

ガンディーの回答は次のようだ。第 II・III・IV 象限における、すべての暴力に対する何物をも恐れなない非協力、および、自立の獲得によるデカップリング（分離）によって、そして、第 I 象限における、

積極的平和を求めるリカップリング（再結合）によって。全く素晴らしい。

結論は次のようである。図1・表3は、3つの暴力〔直接的・構造的・文化的暴力〕と2つの平和〔消極的・積極的平和〕との複雑な関係を示している。具体的な物語や理論のために「広大な知性の領域」（vast intellectual territory）が準備されている。

【注】

- 1) Fischer, Dietrich (1982) "Invulnerability Without Threat: The Swiss Concept of General Defense", *Journal of Peace Research*, Vol.19, No.3, pp.205-225.
- 2) Yoichiro Murakami, Noriko Kawamura, and Shin Chiba, Edited (2005), *Toward a Peaceable Future, Redefining Peace, Security, and Kyosei from a Multidisciplinary Perspective*, Pullman, Washington: Washington State University.
- 3) 本章はガルトゥング自身の次の2論文を基とし、それをさらに発展させたものである。
"Positive and Negative Peace", in Johan Galtung and Dietrich Fischer, Eds, *Johan Galtung, Pioneer of Peace Research*, Springer, 2013.
"Towards a Grand Theory of Negative and Positive Peace: Peace, Security and Conviviality" in: Yoichiro Murakami and Thomas J. Schoenbaum, Eds, *A Grand Design for Peace and Reconciliation: Achieving Kyosei in East Asia*, Edward Elger, pp.90-106, 2008.
- 4) *Macrohistory and Macrohistorians: Perspectives on Individual, Social, and Civilizational Change*, Edited by Johan Galtung and Sohail Inayatullah, Praeger, 1997.
- 5) 相互に学び合える多様な著者達の1例として、付録1に次のような組合せが示されている。
トゥキュディデスーマキャヴェリーホップスークラウゼヴィッツ vs ケセノフォンーエラスムスールソーカント。
- 6) Siu, Ralph (1988) "Panetics-The Study of the Infliction of Suffering", *Journal of Humanistic Psychology*, Vol.28, No.3, pp.6-22.
- 7) Galtung, Johan (2004), *Transcend and Transform, An Invitation to Conflict Work*, Pluto Press, London. ヨハン・ガルトゥング著『ガルトゥング紛争解決学入門——コンフリクト・ワークへの招待』藤田明史＋奥本京子監訳、トランセンド研究会訳、法律文化社、2014年。
- 8) 本文にある“we-culture”の日本語訳を、小田実著『われ=われの哲学』（岩波書店、1986年）に倣い、〈われ=われ〉とした。世界を「『われ=われ』ととらえるとき、そこで『われ=われ=われ=われ…』というふうにつづいて行く連鎖のなかで考えて行くことができる」（p.168）との発想は、“we-culture”の意味するものに通じるところがあると訳者は考えた。なお、“I-culture”の訳語は、例えば「私（わたくし）小説」という言葉がすでにあることから、〈私文化〉とした。
- 9) 第4章は「消極的平和：暴力（violences）の不在」と題され、

第5章は「積極的平和：平和（peaces）の存在」と題されている。

- 10) 第2章 図1で各象限の対角線に方向性を示す矢印が付けられていることを想起されたい。このことの意味をこの一般命題が示している。これはまた本稿の結論部分におけるガンディーへの言及にもつながっている。
- 11) Freedom and sovereignty un against the we-cultures…。原文は、主語の後にここに下線を引いた‘un’とだけあり、完全な形で動詞が欠落している。〔 〕内は文脈から推した訳者の推定である。

訳者解題

本稿は、Johan Galtung, *A theory of Peace: Building Direct Structural Cultural Peace*, Kolofon Press, 2013, Part One, PEACE AS SUMMUM BONUM, 1. What Is in a Word: Peace as summum bonum, 3. A Theory of Peace: Dukkha and Sukhaの翻訳である。これ自体を1つの論文として読めるよう、第1部の3（第3章）を2（第2章）と表記した。読者の読みを助けるために、一続きの文章の適当な箇所に訳者が小見出しを【 】に入れて付した。原文では斜字体で表記されているキーワードや固有名詞などは、訳語に下線を引き、必要と思われる場合には括弧内に原文を入れた。〔 〕内は訳者による補足である。なお、部分訳としての翻訳の性格から鑑み、原著にある注はすべて省略し、代わりに訳者としての注を入れた。

ところで訳者がなぜ『平和の理論』から上記の2つの章を選び出して翻訳したのか。それを説明するのにまず第1部の目次を次に示そう。

第1部 至高善としての平和

1. 平和という一単語の中にあるもの：至高善
2. ソシオサイド・ジェノサイド・エコサイド、至高悪としてのオムニサイド
3. 平和の理論：ドゥッカおよびスカ
4. 消極的平和：諸暴力の不在
5. 積極的平和：諸平和の存在

ここから見て取れるのは、第2・4・5の諸章は、現実における暴力および平和の具体的な在り方の分析が主であるのに対し、第1および3章は、それを踏まえた上で、より抽象的な平和の理論の構築を目指していることである。もちろん両者は発展的な相互関連にある。なお、本書は全5部から構成されており、第2部以下は次のようである。

第2部 平和の諸言説〔エントロピー、エコロジー等の概念と平和〕

第3部 平和の諸要素〔戦争・平和の原因・歴史、構造、文化〕

第4部 平和の諸アクター〔国家、資本、市民社会、メディア〕

第5部 平和の諸レベル〔ミクロ、メゾ、マクロ、メガ、メタ〕

さらに、ガルトゥングが平和学の体系化を企てた、『平和の理論』を含む諸著作を見てみよう。

- ①『平和的手段による平和——平和・紛争および開発・文明』（1996）
- ②『紛争の理論——直接的暴力を克服する』（2010）
- ③『開発の理論——構造的暴力を克服する』（2010）
- ④『平和の理論——直接的・構造的・文化的平和の構築』（2013）
- ⑤『文明の理論——文化的暴力を克服する』（2014）
- ⑥『深層文化・深層構造・深層自然——平和理論と平和行動の3つの柱』（2017）
- ⑦『平和と数学——平和の、平和による、平和のための数学』（2012）

①の『平和的手段による平和』は、ガルトゥング平和学の体系化が企てられた最初のまとまった著作として重要である。②～⑥は5

部作として、理論の細部に亘って彫琢がほどこされ、これによってガルトゥング平和学の全貌が文字通り姿を現わしたと言えよう。

さて、この中で④『平和の理論』はどのような位置を占めているか。それは、他の諸著作を集約した、全体のまとめとしての著作であることは明らかである。ゆえに『平和の理論』の第1および3章は、ガルトゥング平和学の全体系における、より抽象的な「平和の基礎理論」を志向していると言えるであろう。一見、奇異な著作である⑦『平和数学』があるのも、このような文脈において理解できるように思われる。

もちろん、2つの章の翻訳だけでは全く不十分であることは言うまでもない。訳者は今後、時間の許す限り、本書の全訳を試みたいと思っている。

